春日野の露

シテ　露草の精
ワキ　都東山の僧

所　大和春日野
時　秋

次第「花の詠は九重や。〳〵。八重の紅葉をからふよ。

ワキ詞「是は都東山の僧にて候。我等春日の明神に参らず候程に。此度思ひたち。四所明神に参籠申さばやと思ひ候。

道行「夏過て。秋風そよぐ深草の。〳〵。森の下露袖ぬるゝ。井手の玉水底清く。けふみかのはら和泉川。奈良の都に着にけり。〳〵。

詞「急候得共。秋の日の習ひ。早暮かゝる春日の気色。

社頭の灯火しんしんとし。いとゞ心も澄渡り。神さびまさる猿沢の。月の光もかげ清。えならぬ詠にて候。今宵は野宿し。明て参詣申さばやと思ひ候。

サシ「面白や何国より。置とも知らぬ白露の。暮れば草の上に見えて。月を宿せる詭しさよ。実や古き言の葉に。棹鹿の起伏分ず仕へきて。春日の野辺に秋も経にけり。

詞「往事を思ふ内に夜も明方に成やらん。枕に近き鹿の声。今まで宿りし露の月を。鹿の鳴音にふりはてゝ。あさまになりて候はいかに。三笠山。葉山しげやま露ふかみ。月に宿かす。鹿の一声。

シテ女「あさぢふのしのにおしなみ置露を。寔の玉と。思はましかば。

ワキカヽル「ふしぎやな。あけぼのながらほのぐらきに。女の歌を吟ずる声。朝とでの神詣でか。いか成人にて

ましますぞ。

シテ詞「中々。神に詣て。朝清めのかんなぎなるが。只今御僧の詞の末に。月は露には宿らずして。小鹿に宿を召るゝとの。言の葉を不審申さん為。声を知べにより来る也。

ワキ「是は此春日野に通夜する旅の僧成が。露に宿れる月影を。鹿の鳴音にふりおとし。空敷なせば露よりも。鹿を主じとたわぶれしよ。

シテ「辞々夫は愚なり。風にも露は散ぬ物を。立はあけぼの近ければ。寐覚に鹿のなかんとて。先身振ひをなす事也。小鹿の住ぬ草葉の露。落すは月もあくるまで。などかお宿をめさゞらん。

ワキ「実面白きとがめ哉。小鹿の宿りも。露の宿りも。皆うつゝなき空事の。

シテ「互ひにあらそひ。

ワキ「いへばえに。

同「いはねば胸にさはがれて。〳〵。袖に替らぬ草葉迄。問ばや秋は。ものや思ふと。露のかごとも恥かしや。我露草の精成と。木隠に消にけり。朝日待とりて消にけり。（中入）

ワキ「実や如露亦如電。有情非情に至るまで。御法にもるゝものあらじ。

歌「此春日野の草枕。〳〵。暮れば露の玉きはる。御法を唱へ露の紐。ときてお経を読誦せん。〳〵。

後シテ、一声、サシ「露は陰陽の気。陰気勝時はこりて霜雪と成。陽気勝時は散じてつゆと成。何ぞ世にあらゆる類ひ。陰陽の外ならんや。荒面白の雨露の恵みや。

ワキ「枕とるね覚の床。玉をつらぬる露のうてなに。やごとなき人の御有様。其露草にてましますか。

シテ詞「置残る。草葉も見えぬ夕露の。我袖にさへ又余りぬる。露のかごとぞ恥しき。

ワキカヽル「いや〳〵何か隔あらん。我一度は露の身の消をあらそふ。

ワキ「有情非情。

シテ「皆一仏の御法也。

二人「草木国土成仏の。おしへにもるゝ事や有。分て春日の神心。

同「隔てはあらじ三笠山。さして頼めよ後の世の。玉の台も露の身を。〳〵。

同クリ「夫上は徳天に至り。和気感ずる時は則甘露。松柏

にくだる。

サシ「抑天地開闢の昔。一滴の露こりて国と成。

同「天がしたしむ政り事。雨露の恵みにあらざるや。

シテ「又露こりて人と成。

同「淵共海とも川共成。誰れか是をあらそはん。

クセ「目には見れ共白露の。拾へば落る玉笹の。霰より猶けぬべしや。萩の葉に置ける白露玉ぞとて。袖につゝめどたまらぬは。衣の裏の玉なれや。さとらば手にも入ぬべし。皆人の聞置し。言の葉毎に忘しは。庭のおしへの秋の白露消ぬまに。寔のをしへたもてとや。

同「野原より。露のゆかりを尋来て。

同「我衣手に秋風の。吹くや吹ずや世の中は。心よりをく夕露を。袖の外とや人もみる。月の桂の雲隠れ。入日のかげは見えね共。露の光りは残るぞや。千年の鶴も万年の亀も。朽れば露となるものを。

はかなかりける憂世かな。

同「おもしろや。（舞）

ワカ「おもしろや。露にやどかるいな妻の。

同「化成事を人にしれとや。〳〵。〳〵。

シテ「うき世に残る物はあらじな。

同「一日も暮に成。

シテ「一月も移り。

同「一年もたち帰り。

シテ「十年百年。

同「千とせ住ものも。つるには野辺に置る白露。あだなれや〳〵。真如の露の玉。尋よ〳〵春日野も遠し。着たる衣のうらふき返して。露の白玉は光明かくやくとして有物を。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂 著
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会 編